

## 4. 刊行物・主催会議等

気象研究所の研究成果は、気象庁の業務に活用されるほか、研究所の刊行物、研究成果発表会などを通じて社会に還元している。

また、関連する学会や学会誌などで発表することにより、科学技術の発展に貢献している。

### 4.1. 刊行物

#### 気象研究所研究報告 (Papers in Meteorology and Geophysics)

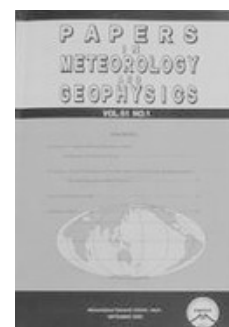
研究成果の学術的な公表を目的とした季刊の論文誌(ISSN 0031-126X)。

気象研究所職員及びその共同研究者による原著論文、短報及び総論(レビュー)を掲載している。主な配布先は、国の内外の研究機関・大学、気象官署などで、国立国会図書館でも閲覧することができる。

平成 17 年度からは 独立行政法人 科学技術振興機構が運営する科学技術情報発信・流通総合システム“J-STAGE”に登録し、オンライン発行とした。

J-STAGE URL: <http://www.jstage.jst.go.jp/browse/mripapers>

平成 19 年度は第 58 巻として計 1 冊を発刊し、次の論文を掲載した。



#### 第 58 巻

- ・坂井孝行, 山本哲也, 福井敬一, 藤原健治, 高木朗充, 中禮正明: 有限要素法による火山性地殻変動の計算精度の確立 — 茂木-山川モデルの再現 —
- ・坂井孝行, 山本哲也, 福井敬一, 藤原健治, 高木朗充, 中禮正明: 深さに比して相対的に大きな半径を有する球圧力源による地表面変位 — 有限要素法による計算 —
- ・Katsumata, A. : Magnitude Determination of Deep-focus Earthquakes in and around Japan with Regional Velocity-amplitude Data (II)
- ・Fujibe, F., N. Yamazaki, K. Kobayashi and H. Nakamigawa : Long-term changes of temperature extremes and day-to-day variability in Japan
- ・Nakaegawa, T., T. Tokuhira, A. Itoh and M. Hosaka : Evaluation of Seasonal Cycles of Hydrological Processes in Japan Meteorological Agency Land Data Analysis
- ・Tanimoto, H., Y. Sawa, H. Matsueda, S. Yonemura, A. Wada, H. Mukai, T. Wang, S. Poon, A. Wong, G. Lee, J.-Y. Jung, K. R. Kim, M. Lee, N. H. Lin, J. L. Wang, C. F. Ou-Yang and C. F. Wu : Evaluation of standards and methods for continuous measurements of carbon monoxide at ground-based sites in Asia
- ・小野木 茂, 堀 晃浩 : ビームスプリッタを用いた 2 波長赤外線湿度計の試作
- ・Wada, A. : Numerical Problems Associated with Tropical Cyclone Intensity Prediction Using a Sophisticated Coupled Typhoon-Ocean Model
- ・高山博之, 黒木英州, 前田憲二 : シミュレーションを用いた東南海・南海地震の発生順序について
- ・Kitabatake, N., S. Hoshino, K. Bessho and F. Fujibe : Structure and Intensity Change of Typhoon Songda (0418) Undergoing Extratropical Transition
- ・Hasegawa, T., T. Yasuda and K. Hanawa : Multidecadal Variability of the Upper Ocean Heat Content Anomaly Field in the North Pacific and its Relationship to the Aleutian Low and the Kuroshio Transport

### 気象研究所技術報告 (Technical Reports of the Meteorological Research Institute)

研究を行うなかで開発された実験方法や観測手法などの技術的内容や研究の結果として得られた資料などを著作物としてまとめることを目的とした刊行物 (ISSN 0386-4049)。主な配布先は、国立国会図書館、国内の研究機関・大学、気象官署などで、気象研究所ホームページ (<http://www.mri-jma.go.jp/>) でも閲覧することができる。



平成 19 年度は、第 51～54 号を発刊した。

第 51 号 「大気および海水中の超微量六フッ化硫黄 ( $\text{SF}_6$ ) の測定手法の高度化と  $\text{SF}_6$  標準ガスの長期安定性の評価」(地球化学研究部：時枝隆之；石井雅夫；斉藤 秀；緑川 貴)

第 52 号 「地球温暖化による東北地方の気候変化に関する研究」(仙台管区気象台；環境・応用気象研究部)

第 53 号 「火山活動評価手法の開発研究」(地震火山研究部)

第 54 号 「Establishment of a cold charcoal trap-gas chromatography-gas counting system for  $^{85}\text{Kr}$  measurements in Japan and results from 1995 to 2006 (日本における活性炭冷却捕集およびガスクロ分離による気体計数システムによる  $^{85}\text{Kr}$  の測定システムの構築および 1995 年から 2006 年の測定結果)」(青山道夫；藤井憲治；廣瀬勝己；五十嵐康人；磯貝啓介；新田 済；Hartmut Sartorius；Clemens Schlosser；Wolfgang Weiss)

## 4.2. 発表会、主催会議等

### 気象研究所研究活動報告会

研究活動報告会は、気象研究所の研究活動や研究成果について、広く社会一般の方々の理解を促進するため、気象研究所が進めている研究のうち、特に気象業務や国の施策に関係の深い事柄について報告を行うもので、新たな気象研究所の取り組みとして平成 15 年度から開始した。

5 回目の開催となる平成 19 年度は、7 月 20 日 (金) に気象庁講堂 (東京) で開催し、「気象研究所における地球温暖化研究」をテーマに次の 3 題を報告した。

- ・ 全球気候モデルの開発と地球温暖化予測・・・・・・・・・・・・・・・・・・行本誠史  
コメンテータ： 江守正多 氏 (国立環境研究所 室長)
- ・ 日本付近の詳細な気候予測を目指した地域気候モデルの現状・・・・・・・・栗原和夫  
コメンテータ： 木村富士男 氏 (筑波大学 教授)
- ・ 吸収性エアロゾルの積雪面への沈着と気候に対するインパクト・・・・・・・・青木輝夫  
コメンテータ： 山崎孝治 氏 (北海道大学 教授)

### 気象研究所研究成果発表会

気象研究所の研究成果を発表することにより、気象研究所の研究成果を広く一般に紹介し、社会的評価を高めることを目的とした発表会で毎年 1 回開催している。

平成 19 年度は、平成 19 年 12 月 26 日 (水) に気象研究所講堂で開催し、研究報告 (平成 19 年度終了課題) について計 7 題を発表した。

## 報告題目

- ・氷晶発生過程に関する研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・村上正隆
- ・上陸台風の構造変化過程とそれに伴う暴風、豪雨、高潮の発生に関する研究  
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・中澤哲夫
- ・日本の異常気象の実態及び気候変動との関連に関する研究  
・・・・・・・・・・・・・・・・藤部文昭、栗原和夫
- ・気候システムとその変動特性のモデルによる研究・・・・・・・・楠 昌司
- ・高解像度(渦解像)海洋大循環モデルの開発と  
それによる水塊の形成、維持、及び変動機構の解明・・・・・・・・本井達夫
- ・海洋データ同化システムの高精度化と海洋現象の季節から経年変動の解析  
・・・・・・・・・・・・・・・・蒲地政文
- ・アジア大陸の影響による大気微量気体・エアロゾル・降水降下塵の  
化学組成変動に関する研究・・・・・・・・松枝秀和

## 「竜巻等突風に関する専門家会合」と「竜巻等突風に関する国際シンポジウム」

平成 18 年 9 月に宮崎県延岡市で、同年 11 月に北海道佐呂間町で竜巻が発生し甚大な被害が発生するなど、竜巻等突風による災害が近年大きな問題となっている。気象研究所・気象庁は、突風の発生メカニズムの解明や予測等に関する研究に取り組んでいる各国の専門家を招き、最新の知見の共有により、我が国における突風の被害軽減・安全確保へ向けた対策の検討に役立てると共に、参加各国の突風研究の推進にも貢献することを目的として、平成 20 年 1 月 9 日から 11 日午前にかけて「竜巻等突風に関する専門家会合」を気象庁（東京）で開催した。この会議には米国、カナダ、オーストラリア、ドイツ、中国からの 11 名の専門家と国内からの 4 名の専門家が参加した。また、1 月 11 日午後には「竜巻等突風に関する国際シンポジウム」を気象庁講堂（東京）で開催した。米国、欧州および日本の専門家による竜巻等突風の最新の研究、及び気象庁の突風対策についても講演が行われた。一般公開したシンポジウムには約 230 名の聴衆が参加した。

## 【シンポジウム講演】

- ・米国における竜巻等突風研究・・・・・・・・ハワード・ブルースタイン教授（オクラホマ大学）
- ・ヨーロッパにおける竜巻等突風研究・・・・・・・・ニコライ・ドーツェク博士（ドイツ大気物理研究所）
- ・日本における竜巻等突風研究・・・・・・・・新野 宏 教授（東京大学）
- ・気象庁が取り組む竜巻等突風対策・・・・・・・・海老原 智（気象庁）
- ・「竜巻等突風に関する専門家会合」の概要紹介・・・・・・・・鈴木 修（気象研究所）